



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 74

Oct. 13, 2021

目次

Invitation 2

第 38 回有機地球化学シンポジウムファーストサーキュラー

力石嘉人、大場康弘、滝沢侑子

Report 3

2021 年度有機地球化学会賞（学術賞）受賞者決まる

2021 年度有機地球化学会賞研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

People 7

「出逢いに生かされてきた私の研究人生」

古賀俊貴

Information 10

日本有機地球化学会 2021 年度 年会費のお支払いについて

日本有機地球化学会 2021 年度 定時総会議事録

Announcement 17

ROG36 巻へ論文を投稿しましょう！！

編集後記 18

Invitation

第 38 回有機地球化学シンポジウムファーストサーキュラー

第 38 回有機地球化学シンポジウム(2021 年札幌シンポジウム)は, 新型コロナウイルス感染症拡大防止に務めながら, 11 月 29 日・30 日の日程で, 北海道大学・低温科学研究所の講堂を使い, 対面とオンラインのハイブリッド形式(*1)で開催いたします。

皆様の研究成果の発表, また, 建設的な議論の場をして, 多くの皆様のご参加をお待ちしております。

*1 ただし, 緊急事態宣言等の発令により, オンラインのみでの開催となる場合もあります。その際には, メーリングリストや学会ホームページにてお知らせいたします。

日程

2021 年 11 月 29 日(月), 30 日(火)

開催形式(*2)

口頭発表・受賞講演

*2 ポスター発表は行いません。

開催場所(*1)

Webex(オンライン), または, 北海道大学低温科学研究所講堂(対面)

(北海道大学低温科学研究所講堂で開催し, 対面・オンラインでの発表を, 配信します)



開催までのスケジュール

10 月 20 日 発表申し込み〆切

11 月 1 日 プログラム公開

11 月 10 日 要旨提出〆切, 参加申し込み〆切

発表希望者は, 2021 年度シンポジウムのホームページ

(<https://sites.google.com/view/orggeochem2021/home>)から, 発表の申し込みと, 要旨の提出を行ってください(*3)。

*3 発表希望者が多数の場合には, 学会員を優先いたします。

参加費

発表者, 参加者ともに無料

世話人: 力石嘉人・大場康弘・滝沢侑子

Report

2021 年度有機地球化学会賞（学術賞）受賞者決まる

有機地球化学賞（学術賞）第 18 号

受賞者：沢田 健 会員（北海道大学大学院）

受賞題目：微細藻類および植物バイオマーカーによる古環境・古生態系復元に関する研究

受賞理由

沢田健会員はこれまで、古環境・古気候学研究（アルケノン水温計等）、地球史研究（バイオマーカー・陸上生態系の起源・進化等）、古生物化学研究（古代植物の化石ポリマー等）、有機堆積学研究（炭質物濃集層の有機分子分析等）、ケロジェン化学（ケロジェン結合態バイオマーカー等）、応用生物地球化学（ハプト藻脂質のバイオ燃料応用等）など多岐にわたる研究に携わってこられ、本学術賞の対象となった分野はそれらのうち藻類や陸上植物のバイオマーカーを用いた古環境・古生態系復元に関する研究である。沢田会員は、堆積物・堆積岩を対象として、バイオマーカーとバイオマーカーが結合したケロジェンを用いた地球生命史の解読を精力的に行い、また古環境・古気候変動の復元を目的とした有機地球化学的研究を国際的にも主導的立場で展開してきた。それらの成果は以下の 4 つの相互に関連する研究に要約される。

（1）アルケノン古水温計の開発とその古海洋学・古気候学への応用

沢田会員は 1990 年代にアルケノン古水温計の開発を行った国際的リーダーの一人である。その後もこの指標の高精度化、適用性の拡張、不飽和比の温度相関性の植物生理学的な仕組みを解明する基礎研究を継続して行ってきた。また、これらを応用した古海洋環境変動の復元研究を展開し、西七島海嶺域の堆積物コアから過去約 3 万年間の古水温変動を復元し、黒潮流軸の変動がグローバルな海洋変動と密接に関わっていることを示した。この研究は *Nature* に筆頭で掲載された。沢田会員は、ハプト藻湖沼生種の培養実験による温度関係式の設定および中国内陸塩湖や南極湖沼などの堆積物アルケノンを用いた水温変動の研究などでも顕著な成果をあげた。

（2）陸上植物バイオマーカーによる古植生復元法の開発とその応用

陸上植物のテルペノイド化合物における構造の多様性は生育環境や生理状態を反映する。テルペノイドとその続成化合物は古生代の地質試料中にも保存されているため、陸域生態系および環境・気候変動の復元研究に使われている。沢田会員は、テルペノイド化合物による古植生解析法の開発およびその応用研究を行って、この分野でも国際的な成果を発表してきた。具体的には、被子植物バイオマーカーを用いた白亜紀の被子植物植生の拡大・変動史の復元、白亜紀中期の海洋無酸素事変（OAE）時における陸源物質の海洋への流入や陸域-海洋間の物質循環の復元、IODP の日本海北海道沖堆積物コアを用いた過去 500 万年間の古植生・古気候変動の復元など、注目される成果を示した。

（3）陸源ケロジェン等を用いた有機堆積学および地球生命史の研究

沢田会員は、ケロジェンを熱分解や化学分解によって低分子量有機分子に分解し、質量分析によって解析する研究法を開発し、おもにタービダイトシーケンスを研究対象として堆積システム、陸域-海洋間の物質循環、陸域-海洋インターフェースの生物地球化学的相互作用の解析研究を展開した。具体的には、本邦の新第三系タービダイトを対象とした古日本海の

陸域-海洋インターフェースの古環境変動の復元，陸源有機物を濃集するタービダイト層の成因と堆積システムの解明，ペルム紀末期の大量絶滅期における陸域生態系の荒廃の復元，などに関して顕著な成果をあげた。

（４）植物抵抗性高分子の高分子化学分析による分子古生物学研究

陸源ケロジェンのうち特定の植物によって合成されたリグニン・クチン・スベリンなどの抵抗性高分子は，これまで有機地球化学分野ではあまり研究されてこなかったが，沢田会員は，これらに環境起因性の代謝情報がよく保存されていることを見出し，古生物学への応用研究を展開している。具体的には，新第三紀植物化石のスベリンポリマーの化学分類，白亜紀の葉化石の化学分類，などに関して顕著な成果をあげている。

以上の研究成果として，沢田会員がこれまで公表した査読付き論文（総説を含む）は 65 編（うち英文 47 編），査読なし論文等は 19 編，著書（分担執筆）は 5 編である。特に論文では *Nature* に 2 編掲載されており，上記のとおり，うち 1 編は筆頭著者である。

これらのことから，沢田会員は，わが国の有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた者と認められ，有機地球化学賞（学術賞）を受賞するに相応しいと判断された。

有機化学賞（学術賞）選考委員会



2021 年度有機地球化学会賞研究奨励賞（田口賞）受賞者決まる

研究奨励賞（田口賞）第 25 号

受賞者：滝沢 祐子 会員(北海道大学・助教)

受賞題目：有機化合物の炭素・窒素同位体比を決定する生化学プロセスに関する研究

受賞理由：

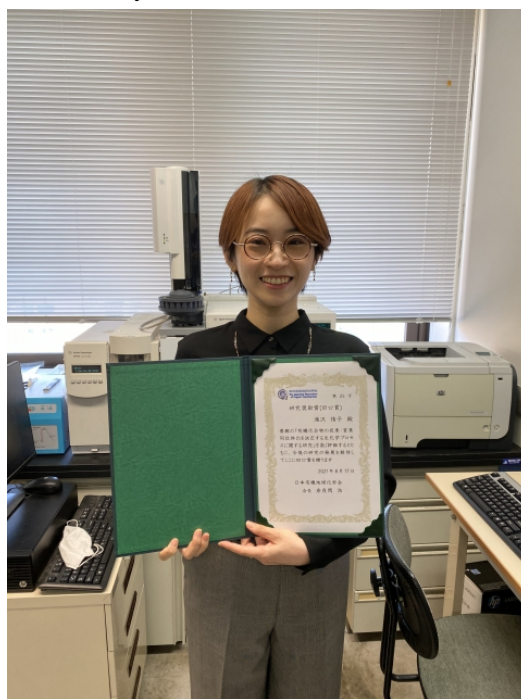
滝沢祐子会員は、生体内で同位体分別をもたらす反応プロセスを特定し、有機化合物の安定同位体比が持つ情報を正確に理解すること、また、観察される同位体比の変化から、生物がいつ、なぜ、どのように有機化合物を利用（合成・貯蓄・分解など）して生きているのかを明らかにすることを目的に、研究を行っている。これまでの研究のうち、「生物体内での同位体分別は、基質と酵素の結合時に、基質の反応部位において軽い同位体（ ^{12}C や ^{14}N ）が優先的に酵素と結合することで引き起こされる」という新説を発表したことは、特筆すべき成果である。

有機化合物の安定同位体比は、自然界で起こる様々な現象を理解するための有効なツールとして、有機地球化学およびその周辺分野で広く用いられている。しかし、科学的根拠となる生体内で同位体分別をもたらす反応プロセス（生化学プロセス）に関する研究は、ほとんど行われていない。それは、アミノ酸などの一次代謝物は、中央代謝における同位体分別を記録していると考えられるが、既存の技術では同位体比（とくに炭素）の測定が困難であること、一方で、*n*-アルカンや脂肪酸などの二次代謝物は、既存の技術で同位体比測定が可能であるが、中央代謝の他に脂質代謝における同位体分別の情報も併せ持つことによる。

滝沢博士は、これらの課題に対し、アミノ酸の炭素同位体比の変化を正確に測定する手法を考案し、実際に $\Delta\delta^{13}\text{C}$ 値の測定に成功し、得られた結果に基づき、海外の研究者を共著者に含む論文（Takizawa et al., 2020 PEPS）に、上記の新説を発表している。これは、従来の炭素同位体分別にまつわる仮説を大きく刷新する新知見であり、生物試料のみならず、大気エアロゾルや堆積物などの環境試料に含まれる有機化合物の同位体比の理解を大きく進め、様々な研究分野の発展に貢献する研究成果であると評価できる。実際、現在までに、国際シンポジウムで 2 件の招待講演を受け、また、IMOG（International Meeting on Organic Geochemistry）において、2017 年、2019 年と連続で口頭発表を行っている。

以上のように滝沢博士は、有機化合物の安定同位体比を利用するうえで、残されている根本的な重要課題に対し、成果をあげている。推薦理由書によると、新しい解析手法の考案、適切な実験系の選択、新規の同位体比測定法の開発を主体的に実施する力、また、得られた結果を海外の研究者とも活発に議論し、最も納得できる説明を導く力があるとされている。これらのことから、滝沢博士が、将来、日本の有機地球化学をリードするだけでなく、国際的な場での活躍も期待できると期待される。よって、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいと判断される。

研究奨励賞（田口賞）選考委員会



研究奨励賞（田口賞）第 26 号

受賞者：風呂田 郷史 会員(産業技術総合研究所・研究員)

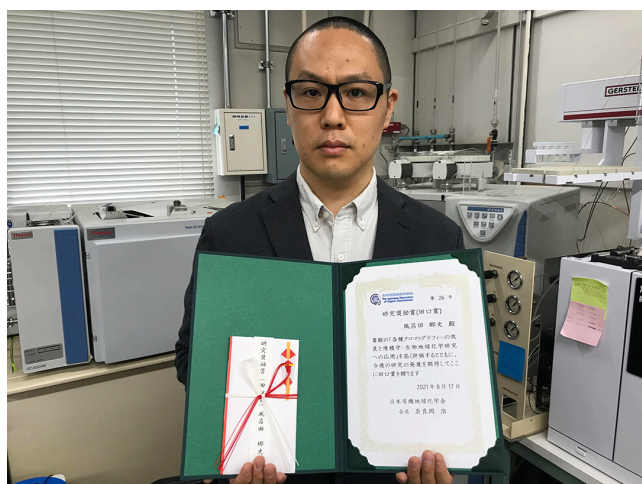
受賞題目：各種クロマトグラフィーの改良と堆積学・生物地球化学研究への応用

受賞理由：

風呂田郷史会員は、現世および地質時代の特殊な堆積構造をもつ堆積シーケンスの有機地球化学調査による堆積メカニズムの解明と古環境変動復元を目的に、研究を行っている。具体的には、北海道中部に分布する新第三系中新統川端層を対象に生物指標分子（バイオマーカー）とケロジェンを用いて古環境変動の復元を行い、かつ川端層で見つかる特徴的な有機物濃集を伴う重力流堆積物のバイオマーカー分析から、その成因・堆積メカニズムを明らかにした。この過程で、とくに陸上植物バイオマーカーの分析手法開発を行い、その分解性分子の組成比を陸上から直接深海まで運搬される洪水性重力流堆積物の同定・分類のための堆積学的指標として提案している。この有機物—植物片を特徴的に濃集するタービダイト層は、大規模な洪水流によって形成されたハイパーピクナイトであることを提案・実証した。この成果を ROG や International Journal of Coal Geology 誌などに原著論文（筆頭著者）として公表している（Furota et al., 2014 ROG; 2021 IJCG）。

風呂田博士は修士課程 1 年生のときに、統合深海掘削計画(IODP) の Exp.339 航海（2011 年 11 月～2012 年 1 月；地中海流出水プロジェクト、イベリアマージン航海）に sedimentologist として参加し、地中海流出水によって生じるドリフト堆積物であるコンターライトを対象に有機地球化学研究を行い、この研究テーマで学振特別研究員(DC1)に採用され、Organic Geochemistry 誌に筆頭著者として論文も発表している（Furota et al., 2016）。その後、Exp.346（アジアモンスーンプロジェクト、日本海航海）にも非乗船研究者であるが参加し、研究成果をあげている（Igarashi et al., 2018）など、複数の IODP プロジェクトに貢献している。

以上のように風呂田博士の研究は、堆積学分野でほとんど応用されていなかったバイオマーカー分析技術を導入し、堆積メカニズム等の解明のために新しい知見を与えていることがとても斬新で有用性の高い、独創性のある研究と評価できる。2016 年の堆積学会では最優秀講演賞を受賞しており、風呂田博士の研究成果はすでに国内の多くの堆積学者に認められるに至っている。また、2011 年に行われた International Geoscience Programme (IGCP) 国際シンポジウム（札幌）では、研究発表だけでなく、field trip も中心的なメンバーとして参加して海外の研究者との交流を深め、国際的な舞台で活躍する堆積学・有機地球化学の研究者といえる。これらのことから、風呂田博士はこの分野において国内でリーダーシップを発揮していくであろうことだけでなく、国際的な活躍も期待される。よって、研究奨励賞（田口賞）を受賞するに相応しいと判断される。



研究奨励賞（田口賞）選考委員会

People

今回は、海洋研究開発機構の古賀俊貴さんにご寄稿いただきました。

「出逢いに生かされてきた私の研究人生」

古賀俊貴（海洋研究開発機構・生物地球化学センター）

みなさま、お初にお目にかかります。古賀俊貴と申します。九州大学で博士号を取得後、学振 PD として今年度から海洋研究開発機構（JAMSTEC）の生物地球化学センターに所属しています。この度は、編集委員の菅原春菜博士に記事の執筆の機会をいただき、とても光栄に感じています。僭越ながら、自己紹介を兼ねて私のこれまでの研究人生について紹介させていただきます。ちなみにですが、私の出身は福岡県の大牟田市です。

学部二年生のときの奈良岡浩教授による地球化学の講義が、私の研究人生の原点となります。「炭素質コンドライト中には地球外起源のアミノ酸が含まれており、そのうちの数種が地球生命のタンパク質アミノ酸と同じ L 体鏡像異性体過剰を示す。」そんな宇宙と生命の起源を繋ぐかもしれない壮大な研究に、ロマンを求めて地球惑星科学科に進学してきた私は、「まさにこれだ！ぜひ隕石アミノ酸について研究してみたい！」と心を奪われました（笑）。

有機宇宙地球化学研究室へ配属後、奈良岡先生のご指導のもとで念願の隕石アミノ酸の研究を始めました。最初は、隕石アミノ酸の生成機構を考察するために、隕石母天体環境を模した実験系でアルデヒドとアンモニアのような低分子の化合物を用いたアミノ酸合成実験を行っていました。抽出した実験生成物中からガスクロマトグラフ質量分析計(GC-MS)でアミノ酸が検出できるだけでも楽しく、未同定の化合物ピークのマススペクトル解析はパズルを解くような面白さがあり、実験にどんどんはまっていきました。

その甲斐もあり、合成実験生成物中にセリンのようなヒドロキシ基をもつアミノ酸の構造異性体が多種多様に生成されていることがわかりました。これらのヒドロキシアミノ酸のグループは当時炭素質隕石からの報告がほとんどなされていませんでした。そのため、奈良岡先生は貴重な隕石試料を私に分配してくださり、多くの学部生は滅多に経験する機会がないであろう、隕石中のアミノ酸分析をさせていただきました。その結果、合成実験でも生成されていたヒドロキシアミノ酸の一連の構造異性体を Murchison 隕石から検出することができました(Koga and Naraoka, 2017, *Scientific Reports*)。

その研究成果を発表するため国際学会に参加した際、隕石アミノ酸研究の第一人者で、上述の奈良岡先生の講義で紹介された研究を行った NASA's Goddard Space Flight Center 所属の Jason Dworkin 博士も参加されていたことで、私の人生に大きな転機が訪れました。私の研究発表の後、Dworkin 博士の隕石アミノ酸研究に魅せ

られて研究を始めたことを話し、まさに芸能人に出会っているような気分を味わい、そして、「Dworkin 博士のラボで研究してみたいのですが、日本学術振興会の若手研究者海外挑戦プログラムの渡航先になっていただくことは可能ですか？」と恐る恐る相談したところ、「君の研究と私たちのラボは完璧にマッチしているから歓迎するよ！」となんともあっさり快諾していただきました（笑）。それどころか、プログラムに採用されなかったときのために、渡米後の私の研究費や生活費の確保までもしていただきました。恐れ多すぎて本当に頭が上がりません。学振のプログラムにも無事に採用され、修士課程を修了した私は、24 年過ごした福岡県からメリーランド州に向けて旅立ち、希望と不安に満ち溢れた約一年間のアメリカ暮らしをスタートさせました。

NASA 滞在中は、Dworkin 博士の同僚である Hannah McLain さんと同じく Goddard に所属する Jason McLain 博士のご自宅にホームステイさせていただきました。場所は、Goddard から少し離れた Crownsville という緑豊かな町で、ザ・アメリカンな McLain 家に最初とても感動しました（写真 1 左）。そして私のアパートとして、空いていた地下の部屋を McLain ご夫妻に改修していただきました（写真 1 右）。McLain ご夫妻には Luke（当時 4 歳）と George（当時 2 歳）という二人の男の子がいて、英語が話すのが得意ではなかった私は二人とよく TV を見たり、一緒に遊んだりして英語を勉強していました（笑）。



写真 1（左）ホームステイ先の McLain 家。実は普段の人の出入りは専ら左側のガレージから。（右）McLain 家の地下にある私のアパート。通称「Tosh's Land」。日本の 1K のアパートの 4 倍くらい広い。

Goddard が位置する Greenbelt という町までは車で 40 分ほど毎日ドライブを楽しみながら通勤していました。写真 2(左)はお世話になった Astrobiology Analytical Laboratory がある Building 34 で、写真 2(右)のように実験室内の GC-MS の横が私の定位置となっていました。



写真 2 (左) 駐車場から見た Building34。Goddard 敷地内には雁・リス・鹿など動物もたくさんいました。(右) 私とその奥の GC-MS (撮影：Jason Dworkin 博士)。Mac でちょうど「はやぶさ 2」のタッチダウンの中継を観ていました。

私の NASA での研究活動として、最初の数ヶ月は、Goddard の研究室で手法が確立されている高速液体クロマトグラム質量分析計を用いて、自分が先行研究で新たに報告したヒドロキシアミノ酸の分布を Murchison 隕石以外の様々なタイプの炭素質隕石において分析することを目指していました。しかし、数ヶ月間に及ぶ手法開発の結果、いくつかのヒドロキシアミノ酸の構造異性体同士をどうしても分離することができなかったため、計画を変更し、九大での研究でも使用していた GC-MS を使用することになりました。

その後は不運なことに、トランプ政権による VISA 制度の変更のため日本へ一時帰国、年明け後は政府閉鎖のため一ヶ月以上の自宅待機、その後もアミノ酸の誘導体化反応が何故かうまく進行しなくなるといったトラブルに見舞われ続けました。かなりスケジュール的に押してしまい、精神的にも辛い時期がありましたが、Goddard のラボの皆様や McLain 家の支えもあり、なんとか渡航期間ぎりぎりまで隕石試料の分析を終えることができました。NASA での研究活動の結果、ヒドロキシアミノ酸は多様なタイプの炭素質隕石に含まれており、特に CM・CR コンドライト間で構造異性体分布が大きく異なることなどを明らかにすることができました(Koga et al., 2021, *Meteoritics and Planetary Sciences*)。

本記事のタイトルの通り、私のこれまでの研究人生は様々な方との出逢いがあったからこそ今日まで歩み続けることができました。現在私が JAMSTEC に所属できているのも、高野淑識センター長代理に学振 PD としての受け入れを快諾していただいたおかげです。本記事で名前を挙げさせていただいた方々はもちろん、ここに書き収めることができないたくさんの方々のおかげで、今の自分があります。研究者としてはまだまだ未熟な限りですが、皆様からの御恩を少しでもお返しするために精一杯精進していきたいと考えております。JAMSTEC で新たに挑戦している天然試料中の核酸塩基の炭素・窒素同位体分析について、今後有機地球化学会で発表できるのを楽しみにしています。それでは、今後とも何卒よろしく願いいたします。

Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2021 年度年会費のお支払いにつきまして

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。
本会の会計年度は 7 月 1 日より翌年 6 月 30 日までとなっており、会員の皆様には、当該期間内に年会費（正会員：年額 3,000 円、学生会員：年額 1,000 円）のお支払いをお願いしております。
まだ、お支払いいただけていない会員の皆様におかれましては、ぜひお早めのお支払いをお願いいたします。

年会費のお支払いには、シクミネットによるオンライン決済システム（<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>）

（メニュー → お支払い → 会費支払い）をご利用ください。コンビニ、ペイジー、クレジットカードによるお支払いが可能です。

なお、2020 年度以前の年会費の未払い分については、シクミネットによる納付ができません。該当する会員様には、個別メールにてご案内いたしますので、ご対応をお願いいたします。

シクミネット上の会員 ID 及び初期パスワード、会費納入済み年度など、ご不明な点がございましたら、事務局（office@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

日本有機地球化学会 会員専用WEB <https://m6.members-support.jp/ogeochem/>



一般社団法人 日本有機地球化学会 2021 年度 定時総会議事録

2021 年 8 月 17 日(火)10:00～12:00

オンライン会議(ホスト設置場所:北海道大学低温科学研究所)

議長:滝沢侑子

出席者:17 名参加(開始時), 委任状 28 名 計 45 名 総会成立 (正会員+名誉会員の 1/5, 24 名以上で成立)

議題

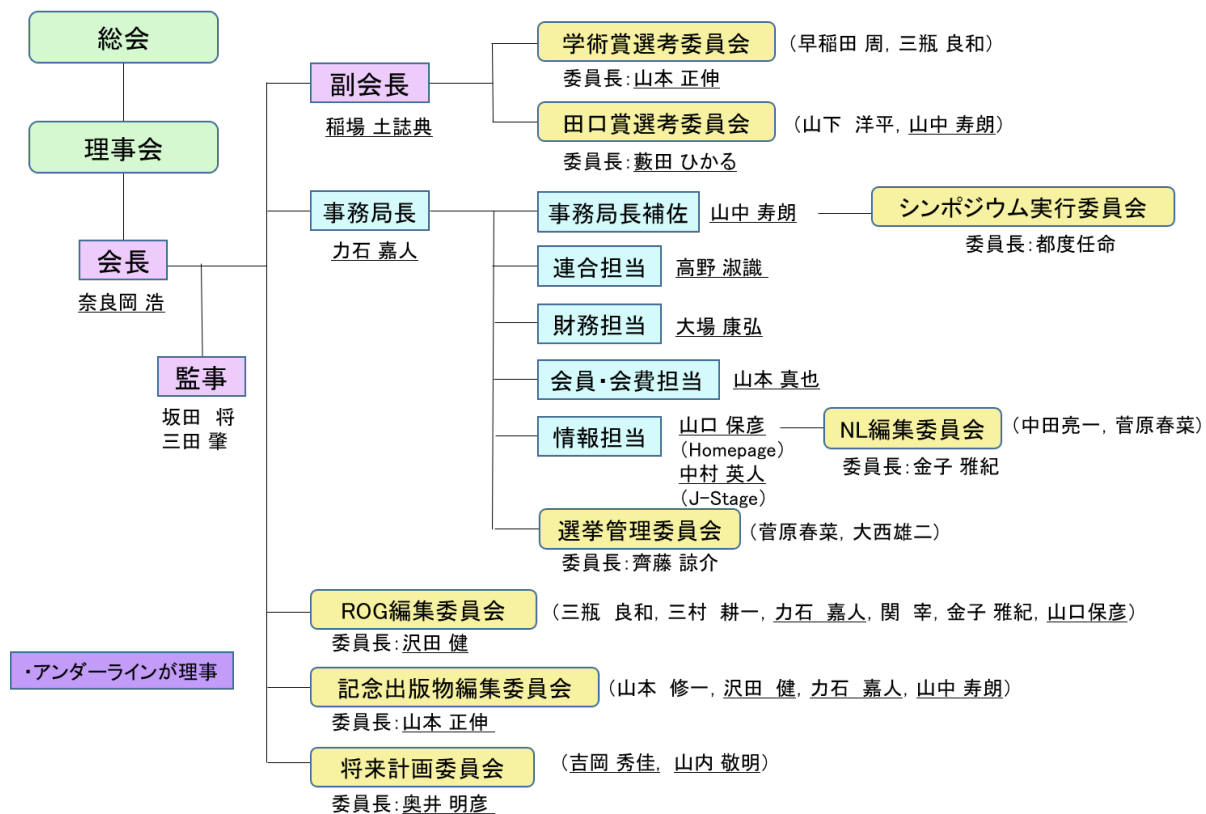
第 1 号議案 2020 年度事業報告 :出席者多数により承認された

- ・第 38 回シンポジウム(新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止)
- ・若手・学生オンライン研究発表会 2020(2020 年 12 月 5 日 オンライン開催)
- ・総会の開催(2020 年 8 月 26 日, オンライン開催)
- ・理事会の開催(2020 年 7 月 27 日, 2021 年 3 月 23 日, オンライン開催)
- ・ROG (2020 年度の印刷無し, オンラインのみ)
- ・ニュースレター No.72(2020 年 7 月 2 日発行), No.73(2021 年 2 月 16 日発行)
- ・有機地球化学賞(学術賞) 長谷川 卓 博士
- ・研究奨励賞(田口賞) 板橋 悠 博士
- ・2021-2022 年の役員選挙の結果

会長に 1 名, 副会長に 1 名, 理事に 13 名, および監事に 2 名の立候補ないし推薦あり
定数以内のため, 当選挙管理委員会の結論として, 全ての候補者を無投票当選と判断

[会長]	奈良岡 浩(九州大学)
[副会長]	稲場 土誌典(株式会社 INPEX)
[監事]	坂田 将(産業技術総合研究所), 三田 肇(福岡工業大学)
[理事]	力石 嘉人(北海道大学), 大場 康弘(北海道大学), 山本 正伸(北海道大学) 沢田 健(北海道大学), 吉岡 秀佳(産業技術総合研究所), 山中 寿朗(東京海洋大学), 高野 淑識(海洋研究開発機構), 山本 真也(山梨県富士山科学研究所), 山口 保彦(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター), 中村 英人(大阪市立大学), 藪田 ひかる(広島大学), 山内 敬明(九州大学), 奥井 明彦(出光興産株式会社)

2021-2022 一般社団法人 日本有機地球化学会 組織図



第 2 号議案 2020 年度会計報告:出席者多数により承認された

2020年度一般会計		2020年度予算	2020年度修正予算	2020年度決算
収入	賛助会費	¥ 160,000	¥ 160,000	¥ 140,000
	個人会費 (2020年度分)	¥ 344,000	¥ 344,000	¥ 242,000
	個人会費 (2019年度以前)	¥ 97,000	¥ 97,000	¥ 15,000
	利子	¥ -	¥ -	¥ 12
	計	¥ 601,000	¥ 601,000	¥ 397,012
負債扱い	個人会費 (2021年度以降先払い分)	¥ -	¥ -	¥ 3,000
支出	ROG印刷費	¥ 350,000	¥ 350,000	¥ 33,220
	ROG送料	¥ 30,000	¥ 30,000	¥ -
	HP維持費	¥ 28,000	¥ 28,000	¥ 29,370
	事務局経費・雑費	¥ 210,000	¥ 200,000	¥ 230,054
	学会年会費	¥ -	¥ 10,000	¥ 10,220
	法人道民税	¥ 20,000	¥ 15,000	¥ -
	法人市民税	¥ 50,000	¥ -	¥ -
	計	¥ 688,000	¥ 633,000	¥ 302,864
	2020年度収支 (収入総計—支出)	¥ -87,000	¥ -32,000	¥ 94,148
	当初資金	¥2,443,429	¥2,443,429	¥ 2,443,429
	次年度繰越金額	¥2,356,429	¥2,411,429	¥ 2,537,577
	次年度繰越金額+2021年度会費既納	¥2,356,429	¥2,411,429	¥ 2,540,577
2020年度田口基金		2020年度予算	2020年度修正予算	2020年度決算
収入	利子	¥ -	¥ -	¥ -
	計	¥ -	¥ -	¥ -
	総計	¥ -	¥ -	¥ -
支出	副賞	¥ 50,000	¥ 50,000	¥ 50,000
	関連経費	¥ -	¥ -	¥ -
	源泉徴収	¥ 1,531	¥ 1,531	¥ -
	計	¥ 51,531	¥ 51,531	¥ 50,000
前年度繰越金		¥1,296,923	¥1,296,923	¥1,296,923
総計		¥ 1,245,392	¥ 1,245,392	¥ 1,246,923

正味財産増減計算書			
令和2年7月1日から令和3年6月30日まで			
一般社団法人日本有機地球化学会			
科目	正味財産	一般正味	指定正味
I. 正味財産増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	382,000	382,000	
受取寄付金	15,000	15,000	
雑収益			
受取利息	12	12	-
経常収益計	397,012	397,012	-
(2) 経常費用			
印刷製本費等	33,000	33,000	
通信運搬費	7,144	7,144	
委託費	229,306	229,306	
支払手数料等	6,380	6,380	
学会年会費	10,000	10,000	
雑費	17,034	17,034	
研究奨励賞賞金	50,000		50,000
経常費用計	352,864	302,864	50,000
当期計上増減額	44,148	94,148	-50,000
正味財産期首残高	3,740,352	2,443,429	1,296,923
正味財産期末残高	3,784,500	2,537,577	1,246,923

貸借対照表			
一般社団法人日本有機地球化学会			
令和3年7月1日現在(単位:円)			
科目	令和3年度	令和2年度	増減
【資産の部】			
【流動資産】			
通常貯金	1366803	1355655	11148
定額貯金	1200000	1200000	0
郵便振替貯金	1220697	1193697	27000
流動資産合計	3787500	3749352	38148
資産合計	3787500	3749352	38148
【負債の部】			
【流動負債】			
前受会費	3000	9000	-6000
負債合計	3000	9000	-6000
【正味財産の部】			
【指定正味財産】			
基金	1246923	1296923	-50000
寄付金	0	0	0
指定正味財産合計	1246923	1296923	-50000
【一般正味財産】	2537577	2443429	94148
正味財産合計	3784500	3740352	44148
負債及び正味財産合計	3787500	3749352	38148

会計監査報告

一般社団法人日本有機地球化学会の一般会計および田口基金の2020年度会計報告(2020.7.1-2021.6.30)を、出納簿、請求書、郵便貯金および振替口座、その他提示された証明書類に基づいて審査した結果、それが正確に処理されていると認められました。また、これらに基づき貸借対照表、正味財産増減計算書が正しく記載されていることを確認しました。以上、ここにご報告致します。

2021年7月21日

監事 三田肇



第3号議案 2021年度事業計画(2021年7月1日～2022年6月30日):出席者多数により承認された

- ・第38回有機地球化学シンポジウム(北大低温研でのハイブリッド開催)
- ・定時総会の開催(2021年8月17日, オンライン開催)
- ・理事会の開催(2021年7月19日, オンライン開催; 次回未定)
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・ROG編集委員会
- ・記念事業・マニュアル編集委員会
- ・共催:日本地質学会第128年学術大会(ハイブリッド開催)
- ・ニュースレター No.74, No.75 予定
- ・ROG Vol.36(2021年12月発行予定)

事務局より, 新型コロナウイルスの感染拡大防止を徹底しながら, 11月下旬もしくは12月上旬に, 北海道大学・低温科学研究所で, ハイブリッドのシンポジウムを開催する(非常事態宣言が出されている場合には, オンラインで実施する)との説明があった。

第4号議案 2021年度会計計画:出席者多数により承認された

2021年度一般会計		2021年度予算	2020年度実績	増減
収入	賛助会費	¥ 160,000	¥ 140,000	20,000
	個人会費 (2021年度分)	¥ 347,000	¥ 242,000	105,000
	個人会費 (2020年度以前未納分)	¥ 130,000	¥ 15,000	115,000
	シンポジウム協賛金・剰余金	¥ -	¥ -	0
	シンポジウム参加費	¥ -	¥ -	0
	利子	¥ -	¥ 12	▲12
	計	¥ 637,000	¥ 397,012	239,988
支出	ROG印刷費	¥ 350,000	¥ 33,220	316,780
	ROG送料	¥ 30,000	¥ -	30,000
	HP維持費	¥ 29,370	¥ 29,370	0
	シンポジウム費用	¥ -	¥ -	0
	事務局経費・雑費	¥ 24,000	¥ 24,838	▲838
	シクミネット使用料	¥ 205,656	¥ 205,216	440
	学会年会費	¥ 10,220	¥ 10,220	0
	法人道民税	¥ 15,000	¥ -	15,000
	法人市民税	¥ -	¥ -	0
	計	¥ 664,246	¥ 302,864	361,382
収支総計		¥ -27,246	¥ 94,148	▲121,394
2020年度繰り越し		¥ 2,537,577		
年度末資産予測		¥ 2,510,331		
2021年度田口基金		2021年度予算	2020年度実績	増減
収入	利子	¥ -	¥ -	0
	総計	¥ -	¥ -	0
支出	副賞	¥ 50,000	¥ 50,000	0
	関連経費	¥ -	¥ -	0
	源泉徴収	¥ 1,531	¥ -	1,531
	計	¥ 51,531	¥ 50,000	1,531
収支総計		¥ -51,531	¥ -50,000	▲1,531
2020年度繰り越し		¥ 1,246,923		
総計		¥ 1,195,392		

会計担当より、今年度のシンポジウムはハイブリッド開催、北海道大学低温研の講堂の使用料がかからないため、予算を計上しないとの説明があった。シクミネットの利用料が高価であるので、すぐにはないが将来、検討が必要であるという意見があった。ROG 冊子体を電子化(PDF 化)することで印刷費を削減できるのではないかという意見が出されたが、レイアウト等に費用がかかるため、PDF 化しても支出は削減できないと ROG 編集委員長より返事があった。

事務局より、法人にかかる税金については未だ不明な部分が多いとの返答があった。

報告事項

会員状況

正会員 112 名(+2, 前年比), 学生会員 15 名(±0, 前年比), シニア会員 8 名(+3, 前年比), 名誉会員 6 名(-3, 前年比), 賛助会員 7 名(±0, 前年比)

2021 年度顕彰者

有機地球化学賞(学術賞):

沢田健会員(北海道大学・教授)「微細藻類および植物バイオマーカーによる古環境・古生態系復元に関する研究」

研究奨励賞(田口賞):

滝沢祐子会員(北海道大学・助教)「有機化合物の炭素・窒素同位体比を決定する生化学プロセスに関する研究」

研究奨励賞(田口賞):

風呂田郷史会員(産業技術総合研究所・研究員)「各種クロマトグラフィーの改良と堆積学・生物地球化学研究への応用」

Researches in Organic Geochemistry Volume 36 編集状況

Vol.36, No.1 を 2021 年 10 月(web 公開), No.2 を 2021 年 12 月に刊行予定

・Vol.36 の冊子体の印刷は 2022 年 1 月以降

Announcement

**ROG 36 巻 2 号 (Vol.36, No.2) が WEB 公開予定。
ROG 36 巻へ論文を投稿しましょう！**

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、WEB 公開および冊子を発行しております。ROG Vol.36 の発刊は 2020 年分 (No.1) を併せて 2021 年 12 月末に発行する予定です。その前に、Vol.36, No.2 として WEB 公開を 10 月中には行うことができますと思います。その後、Vol.36, No.3 を 12 月末に WEB 公開する予定です。ROG Vol.36 の冊子は、遅くとも 2022 年 1 月頃に本学会会員の皆様の下に郵送にてお届けしたいと考えております。コロナ禍の影響もあってか 2020 年には ROG を発刊できない状況になりましたが、世の中の劣勢に負けず研究・執筆活動を進められて、その成果をぜひ ROG へご投稿して下さるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページ、または ROG Vol.35 の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域のボトムアップをより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

北海道大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

編集後記

有機地球化学会の法人化に伴い、総会や選挙などの時期が変わったため、ニュースレターの発行時期も変更いたしました。今後も積極的に情報を発信して行ければと思っています。(金)

ようやく国内の新型コロナウイルス感染状況も落ち着き、緊急事態宣言も解除されました。今年こそは有機地球化学シンポジウムを現地開催できることを願っております。(菅)

10月になって朝晩は涼くなりましたが、昼間はまだ夏のように暑く体調管理が難しいですね。みなさまご自愛ください。(中)

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩
〒819-0395 福岡市西区元岡744 (ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529)
九州大学 大学院理学研究院地球惑星科学部門
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局
〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野
事務局長 力石 嘉人
Phone : 011-706-5472 (直通)
E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀 (産業技術総合研究所)、中田 亮一 (海洋研究開発機構)、
菅原 春菜 (宇宙航空研究開発機構) :
e-mail: rog_nl@ogeochem.jp